

目的 最近公共トイレにも腰掛け式の洋式トイレが増加しているが、不特定多数の人と間接的に肌が触れる、腰掛け部位の衛生状態が公衆衛生上問題となる。このため、学校、デパート、病院、飲食店等の公共の洋式トイレの便座の細菌による汚染度を調べると共に、検出菌を分離同定し、汚染源の推定と感染の危険性について推察した。更に、人工汚染によるモデル系において、市販クリナーや便座カバーの細菌汚染に対する効果を検討した。

方法 日水のフードスタンプ（生菌数，黄色ブドウ球菌，大腸菌群用）を用い，スタンプ法により公共トイレ（現時点で100箇所）の各便座につき5箇所（50cm<sup>2</sup>）当たりの生菌数を常法により測定した。検出菌を平板分離培養法により純粋分離し Cowan と Steel の検索表を用い，各菌の属を同定した。また，子供用便座を Escherichia coli および Staphylococcus aureus で人工汚染し，市販クリナー使用後の残存菌数，便座カバー上の菌数より，これらの効果を調べた。

結果 生菌数は場所，日時により 4-1400 個 / 50cm<sup>2</sup> とバラツキが見られたが，同系統の場所では，6-8月の夏期には平均すると 10-1月の冬季の 3-5 倍数が検出され，大腸菌群，ブドウ状球菌も，夏期には数カ所から検出されたのに対し，冬季には，検出頻度が減少した。同定された菌は Staphylococcus，Aerococcus，Bacillus 属が同定菌の 7-8割を占め，場所や分離の季節による変化はほとんど見られなかった。人工汚染実験により E. Coli，S. aureus の便座汚染に対して，市販クリナー，カバーの効果が認められた。

また，公共トイレに関する意識調査の結果も合わせて報告する。